

時化と鮮魚介類の需要（16）

前回の続き。石川県産の穴を「他県産・他国産」が埋めているのは、果たして3連休のみの話だけであろうか。恒常的に「他県産・他国産」が店頭に並んでいるのではない。これは、一概に最川上である生産者（漁業者）や彼らを指導する立場の漁連・行政を責めることはできないが、産油国同様に「供給の制限」による「魚価の高騰」を意図しているならば、大きな間違いである。正に「他県産・他国産」がその穴を埋めることになる。

◇生産者（漁業者）の意識改革について

- 1) 同じ魚種を安く運賃をかけて、遠い産地から運搬するより、産地である「地元」で消費した方（地産地消）が「合理的」であることは、火を見るよりも明らか。
- 2) 「需要」の「波」は殆どない。確実に一定の「需要」は間違いなく存在する。
- 3) 金額ベースで推察する「高単価」が「総金額」に占める割合は数%に過ぎない。やはり、どう考えても「廉価」が「総金額」の90数%を占めることは事実であろう。ご贈答品や「年一」に召し上がる「高単価（高級）品」の「需要」が希薄となることは、必然。
- 4) 2) 3) より「日常利用」の「安定的」な「需要」が「圧倒的」に多いことを正しく認識し、現状それら「需要」に対して、その多くを「他県産・他国産」が「供給」している「事実」を看過してはならない。もしかして指向が180°違うのか。
- 5) 計画的な休漁・休市（産地）や時化による休漁・休市（産地）によって、安定的な「供給」が阻害されることを捕ってあまりある「需要」と「供給」のタイミングのズレを補完する安価で簡便な「バッファ」を設け「供給」の穴を埋める「工夫」を自ら実施する。
- 6) 「農業の6次化」に倣い、「水産業の6次化」に少しでも近づけるよう、出来る限りの「加工」を施し、その価値を高める努力を怠ると、現状の延長線上には、ダーウィンの進化論ではないが「種の絶滅」＝「水産業の壊滅」が待ち受けていること必至。
- 7) 「今何が漁獲されたか」→「今何が出荷可能か」への「見える化」の転換。

現状、多くの漁業者が「危機感」を持ち合わせているが、どの様に行動すれば良いのか分からないし、自分一人または、1地域だけではどうしようもないことも自覚している。それでも何かしなければと、あちらこちらで「（自らの）利」を追究し、繰り返し「部分最適」を繰り返しているのが現状である。また、その存続や運命を「誰かに」委ねているかの雰囲気さえも漂い、「手詰まり感」が薄っすらと感じられる。

その「誰かに」は、いったい誰なのか。誰にその存続や運命を委ねられるべきなのか。また、「誰が」声を上げ、「誰が」共感し、「誰が」連帯し、「誰が」行動し、「誰が」その正しい評価を下すのか。真のお客様（源泉）は誰なのか真剣に考えるべきである。